かつしかの暮らしと文化 151

葛飾花逍遥

水がぬるみ、花が街を彩る季節になりましたが、今年は桜の開花も早く、すでに桜花は舞い落ちて、街路樹のハナミズキなどの花が彩りを添えています。花見を満喫できなかった人もいるかもしれませんが、花見の対象は桜花だけでなく、その時々の花を愛でるのもまた一興です。

もともと葛飾周辺は、江戸の昔から花の栽培が盛んで、家の周辺や田畑のあぜなどに四季折々の草花を栽培し、その良い香りが漂っていました。

今からおよそ200年前、葛飾の花を楽しんだ人物に、十方庵敬順がいます。『遊暦雑記』によると、敬順は文化9年(1812)4月17日に浄光寺(東四つ木)を訪れる途中、日和も良く、路傍に遅れ咲の花が枝に残り、杜若や卯の花の類が咲いているのを見て花に浮かれています。

この時敬順は、浄光寺の秘仏の御開帳を詣でるために足を向けました。秘仏や路傍の花だけでなく、近在から集った人々の服装や境内にある茶店での飲食風景を観察しては「面白し」と、一人興に入っていました。

さらに敬順は、3年後の文化12年(1815)4月14日にも浄光寺を再訪しています。その道すがら敬順の一行は、卯の半刻(午前7時)に廓然寺(文京区)を出発し、千駄木(文京区)の茶店などで休憩をとりつつ足を進め、橋場(台東区)の酒楼で昼食をとり、四つ木の酒店では「木の芽田楽」を頬張りながら杯を交わしました。敬順は下戸なので酒は飲まずに、携帯した茶道具で茶を煎じ、店の老婆にも振る舞います。その時、居合わせた客が、敬順の「茶の煎じ空」を小皿に移し、醤油をかけて酒のつまみにしました。これを見て敬順は、「又一興かや」とその土地ならではの所業に驚き感心します。

ようやく浄光寺に着いた一行は、芽吹いた楓の色の美しさに見とれ、境内の茶店に安座して、江戸近在随一と評される杜若を愛でながら、参詣に訪れた人々の様などを観察して時を過ごします。

敬順が訪れた浄光寺境内は、荒川放水路の開削で失われて、現在は流路となってしまいました。しかし、移転先の新しい境内では藤棚の、藤の花が、失われた杜若の紫色を愛おしむように咲き誇っています。例年、今ごろから5月頃までが見頃です。地図を片手に、葛飾の四季折々の花を愛でながら散策を楽しんでみてはいかがですか。

(郷土と天文の博物館)

浄光寺に咲く藤の花